

---

# とわのこぬこ

uyr yama

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とわのこぬこ

### 【著者名】

2029Y

### 【作者名】

uyr yama

### 【あらすじ】

ぬこは今日も、にゃーにゃー、にゃーにゃー。海鳴の街の空は青く。海も、青い。世界は広く、暖かく。やさしいご主人と、その妹たち。そんな優しい環境で、ぬこは前世のしがらみに気付かない。だって、ぬこはぬこだもんね？

## むじてんせー

身体中が痛い。

呼吸をするのも辛いほど。

いいや、それこそ、生きる事が辛くなるくらいに、身体が痛い。

痛みのせいなのか？

視界がぼやけて何も見えない。

耳鳴りが酷く、聞こえてくる音はザーザーといった異音だけ。

だから周りがどうなっているのかもワカラナイ。

ああ、死ぬのだな……

あともうちょっとだったのにな……

苦節20ウン年。年齢=彼女イナイ歴から何とか脱し、よひよへ、  
ようやく童貞を卒業できそうだったのに……っ！

クソッ、クソッ、クソッー！

腹立たしさと無念さで、気が狂ってしまってしつだ。  
だけども、まあ、仕方ないか……

傷だらけで血塗れな青年は、そこで生きるのを諦めた。

彼は諦めが速いのだ。

泣いてすがる恋人と、青年に突き飛ばされて呆然としている少女と、その少女の母親が申し訳無むをもつて、ありがとうございました、ありがとうございました。何度も頭を下げていた。

でも、耳鳴りが酷い青年の耳には届かない。

「クソ、マジで痛えよ……」

吐き捨てられた悪態は、恋人の嘆きの慟哭のせいで誰の耳にも届かない。

それでも、今わの際の奇跡なのか、青年の視界がクリアに広がった。耳鳴りがサアーッとひいて、全ての声が聞こえる様になった。

青い、青い、どこまでも青い空だ。

ざわめきと、嘆きの慟哭が、それら全てを台無しにしてたけど。

視線を巡らせる。

涙と鼻水まみれの恋人と、真っ青にしているトラックの運転手。

そして、黒い子猫。

「生まれ変わるなり、ぬこがいい

「バカっ！ なに……なに言つてんのよおつー！ つて、ぬこつて言い方止めなさいってあれだけ言つたでしょー？ オタク臭いのは

止めるつてアレだけ……」

泣きながらそう言つ恋人に、青年は最期の力で笑つてみせた。

「お、まえの、そういうトコが、大嫌いなんだ。だから、もう、別  
れようぜ。そして、わざと、俺のことな……か、わす……ちま、  
え……」

死に際に格好つけるのは、漢のロマン。  
満足だ。これ以上ないくらいに満足だ。

童貞捨てられてたら、言つ事なかつたんだけな～。

そこで、青年の命の鼓動が止まつた。

「ばかあーつー！」

だから恋人の嘆きの絶叫は、青年の耳には届かなかつた。

次に気がついたとき、やっぱり田は見えなかつた。

それでも本能なのかな？

暖かい何かにすりよつて、必死にかぶりついた。  
周りにも、自分と同じ何かが一杯いる。

なー なー みーー みーー

ああ、この声は、ぬこ だ！

いや、もしかして、自分もぬこなのではなかろうか？

そういや、死ぬ直前に思ったなー。

生まれ変わるなら、ぬこがいって。

そう考へながら、ぬこは兄弟だか姉妹に負けないよつ、必死にお母さんネコのおっぱいをちゅーちゅーする。

人間じゃなくなつたのはショックだけども、これからぬこ生、必死に生きる為にはおっぱいが必要なのだ！

元青年……現ぬこはやつぱり諦めが速かつた。  
人間としてのプライドをあつさつ捨てて、ぬこになったのだから。

ぬこは今田からぬこになる。

ネコではなくて、ぬこ。

彼女が言つてたではないか。

ネコをぬこと呼ぶのはヤメ口つて。

オタクみたいだからヤメ口つて。

だつたらぬこはぬこにならうと思つ。

世の紳士たちの為にも、ネコではなくぬこ。

そつすれば、もう、オタクだとバカにされないのだから……

ぬこが自分をぬこだと言つても、しょせんはネコなんだと分かつて  
いない。

そんなぬこは、お腹いっぱいオッパイを吸つて、ふあ～と大きく欠  
伸をしたあと、兄弟姉妹に囲まれながら、暖かい眠りにつくのだ。

わあ、アナタの望みはかないました。

どうか、今度は幸せに……

ぬこは田の前の光景に、目をキラキラさせた。

ぬことして産まれ落ちて以来、初めて田にした人の文明。  
小高い丘の上から見たその光景は、前世の人間だった頃の郷愁を、  
否が応にも思い越されるからです。

「みやー」「みー」「みやー」「みやん」「なーなー」

さあ、行くのだ！

つと、ぬこのきょうだい達はぬこを急かしました。

ぬこを置いて、いつのまにやら立派な大人の猫に成長したぬこのき  
ょうだい。

でもぬこは、いつまで経っても「ぬこのまんま。

きょうだい達は、みんなみんな立派な成猫になつたのに。  
そうして一匹、また一匹とママネコさんの下から巣立っていくきょ  
うだいたち。

本当だつたらぬこもきょうだいたちと一緒に巣立つはずだったのに、

ママネコも、あみつだいネコも、ひらちやいぬが心配で仕方ありません。

だからぬこママネコとずっと一緒に。

ぬこが産まれた春の季節から、とっても暑い夏に変わり、色鮮やかな秋に変わり、白い死神が吹き荒ぶ冬になり……

そうして再び春になつたある日、ママネコの下から巣立つたきょうだい達が、ぬこことつての優しい世界を見つけ出し、こうして此処へと連れて來たのです。

この世で最も猫にとって安全だろう、海鳴の町にて、ぬこにとっての安息の地となると信じて。

ぬこは子供の両手に納まる程度の身体をピョント跳ねさせ、きょうだいと、そして大好きなママネコの方をジッと見ます。

「ここやーう（ぬこ）、アナタの巣立つ日が来ました」

「なーう？（なに言つてんの？）

……前世が人間だったせいでしょうか？

ぬこは猫語が分かりませんでした。

それでも雰囲気的に何を言つてるのか分かってるのでしょうか。

小さな小さな両のお皿々に涙がいっぱい。

立派な成猫になつたきょうだいたひこ、ふわふわモコモコの類ですりすりと頬ずり。

最後にママネコの鼻先をペロリと舐め……坂を一気に駆け下ります。

精神が完全に「ぬ」になつた、前世が人間で、今せ「ぬ」のぬ。あよつだことママネコが心配やつて見守る中、コトント足を引つ掛け、

「みやづつーー?」

モモのよつてりんじらうと、人間の町へと転がり落ちてこあましだ。

「みやづみやづみやーー?」

思わずぬこに駆け寄つやつになつたあよつだことママネコたが。

でも、

「みやづみやづみやーー?」

ぬこの結構余裕やつな鳴き声に、足を止め、後ろを振り向きます。

「みやづみやづみやーー?」

一斉に別れの一聲を上げると、「みーつーー」ぬこの鳴き声を背に  
猫の世界へと帰つていきました。

わよつなり、ぬこ

猫たちの、別れの言葉……

猫の……野生の世界は厳しい。

もう、会つ事はないだらう、きょうだいとママネ!»。

ぬこは泣きながら転がり、そして……

ひやつぼー。人間じはんがぬこを待つてるぜー！

あつさりと氣分を変えました。

……ぬこは、諦めが速く、氣分の入れ替えも速いのです。

そうして、ぬこになつて初めてのアスファルトに、ぬこになつて初めての海の香り。

ぬこになつて初めての人間に、ぬこになつて初めてのひとつまつち

……

とわの「ぬこ」の冒険が、はじめて始まるのでした。

なーう なーう にゃん にゃん にゃん みゅー・

ぬこの鳴き声が、海鳴りの町に響きます。

ぬこはそろそろ人間の食べ物が恋しいです。

ネズミやスズメがご馳走な生活もいい加減に疲れたし。

ああ、魅惑のジャンクフード……

待つてろー！ コンビニー！

待つてろー！ カップラーメンー！

ぬこは、自分がぬこだって、覚えてるんでしょうか？  
ぬこが行つても、コンビニでカップラーメンは買えませんのにね。



みー

むかーしむかし、海鳴の町にてぬいじがおつました。

そのじぬい、

リンカー・コアを持つてたり、気を操って最強ぬこだつたり、  
はたまたジュエルシードの力でミコータント化したり、  
いやいや、それどころか死にかけて使い魔化したり、

なーんて、いっさいない、普通だけどもちょっと変わったじぬい。

ぬいは海鳴の町に入るなり誓います。

ぬいは、町に生きる立派な野良ぬいになる！

ママネー！やめようだいに負けない、立派な野良ぬいになるのだ！

とこととと……

立派な野良ぬいを田舎すぬいが、海鳴の町を短い足で疾走します。

田舎ではコンビニ。人間じゃん！

……そり、こんなちよつと変わった とわのこぬこのお話が、海鳴の町で始まります。

通りすがりの人々が、ほんわかした表情で見ている黒い毛玉。  
ちょこんとコンビニの前に座る様が、とっても愛らしい。

「みやづ……」

でも、悲しげに鳴いています。

ぬこの田の前の建物からは、とても好い匂いがしてくるからです。お腹があやつって鳴るのに、ぬこはその建物の中に入ることが出来ません。

カリカリ、カリカリ……

「にゅー、にゅー」

悲しげに泣きながら、入り口の扉に爪を立てぬこ。  
おでん、にくまん、お弁当……  
数々の魅惑の商品がそこにある。

でもぬこはぬこだ。

人ではないから入れない。

いいえ、入ることが出来たとしても、中の商品を買ひことは出来ないのです。

それに、建物の中の人間が、煩わしげにぬこを睨みます。

ぬことして生を受け、初めて感じる人間の負の感情。

ビクンッ！ 背中と言わず、全身が総毛立つ。

ぬこは後ずさるよつにして数歩後ろに下がると、次の瞬間ににはピコ  
ーっと一田散に逃げ出しました。

「みゅあ、みゅーみゅーみゅー（怖えー、人間怖えー）」

ぬこは忘れていたのです。  
自分がただのぬこだつて。  
力もお金も何もない。ただのぬこだつて。

ぬこは寂しげに周りを見ます。

視界は低く、地面に近い。

今まで森の中で、周囲には猫だけだったから気にしませんでしたが、やっぱり人とぬこは違いました。ぬこであると決めてはいましたが、まだまだ心の奥底では人間だと思っていたのです。

でも、ぬこは強い子です。

たとえ力がない とわの「ぬこ」でも、心の強さだけは誰にも負けない。

だから、「元やん、元やつ（元、こつか）」「いやつぱりあいつ」と氣分を変えました。

果たして、「元やんの強さなんじょいかね……？」

それはともかく、ぬこはお尻ぶつぶつ、しゃばりフリフリしながら歩き出します。

ぬこはお腹が空こてるのです。

小さな身体でも、こつぱに食べるぬこ。

死の冬を乗り越えただけあって、一日一日程度食事を抜いても死にはしませんが、このままでは力が出なくなつて狩りが出来なくつてしまつのです。

……今はもう、ぬこを守り、ぬこのためにご飯をとってくれるママ  
ネ「はいません。

ぬこは全部自分の力でご飯をゲットしないといけないのです。

と、その時でした。

ぬこの身体が大きな影に覆われたのは！  
マズイ！　ぬこは大慌てで逃げ出そうとします！

ぬこは食物連鎖的に結構下の方に陣取つてますから、自分よりも身体が大きい獣や、空を飛ぶ猛禽類とかカラスなんかに襲われたらひとたまりもありません。

だからダッシュしようと足に力を入れた瞬間、

「腹が空いているのか？」

久々に人間の言葉を聞きました。  
ぬこは恐る恐る後ろを振り返ります。

ズボンは黒、服も黒、髪も黒ならば瞳の色も黒。

全身黒ずくめの高校生位の少年が、むつとした顔でぬこを見下ろしています。

ぬこは猫の言葉は分からなかつたけど、やつぱり人間の言葉は分かるんだなと思いながら、「なー」と一声鳴きました。すると少年はコンビニの袋の中から缶詰を取り出し、パカッと開けて、ぬこの前に差し出します。

缶詰には、猫まつしげりーと書いてあるのがぬこには読めました。

「いや、ひへ（食べていいの？）」

ぬこは不思議そつに鳴きます。

「ああ、いいぞ」

「みやう~（ほんと？）」

「ああ、ほんとのほんとだ」

「なーう、なーうつー！」

元人間としてのプライドがまつたくないぬこは、喜んで缶詰に顔をつつこみ、がふがふ、がふがふ、と一心不乱に食ります。

初めて食べる猫缶は、思っていたよりもずっと美味しく感じられました。

それがぬこだからなのか、元々美味しいものだつたからなのかは、ぬこには分かりません。

「乳離れは済んでたか……ミルクと猫缶、どちらがイイのか迷つたが、よかつた」

少年のむつりとしたしかめつ面が、ふんわり柔らかく笑みました。

げふつ

ぬこは全部食べ終わると、小さくゲップします。

そつして前足で顔を「じこじこ」したあと、少年に「みつこー」元気良くお礼しました。

そして『返づく』のです。

「ユヤウスカ（どうしてぬこがお腹が空こてるのを知つてたの？）

すむと少年は言こます。

「ローバーの前で鳴いてただろ？」

「なーうへ（それだけで？）」

「ああ」

少年は言葉少なくそつまつと、ぬこが食べた猫缶をコンビニ袋に戻し、踵を返しました。

「じゃ、またな」

ぬこに背中を向け、手を小さくひらひらと振ります。  
それはやぶやけの挨拶。

でも、ぬこは……

ぬこは、この黒いのをじしゃじんに決めた。

無愛想でちょっと怖い田つきだけど、きっと優しい人だとぬこセンサーが告げるから。

もう立派な野良ぬこになるなんて誓い、すっかり忘れてます。  
ぬこはぴょいぴょいと、短い足で必死に少年の後を追いかける。  
そんなぬこに困った少年は、ぬこを抱き上げ視線を合わせると、

「家は飲食店なんだ。だからお前は飼えん」

やつぱりせつと告げるのです。

でも、ぬこせそのまま少年の身体によじ登り肩に到ると、しつかとしがみつきました。

そうして少年の頬に何度も頬ずりして、

「じゅじん、ぬこをもふる権利をあげよー。」

なんだつたら、肉球ふにる権利でもいいだー！

少年は大きく、「はあ～」と溜息を吐くと、疲れたよつて血色へと向います。

「一応せゆさんと父さん」聞いてみるが……」

ダメだといわれたら、その時は諦めろよ。?

言外にやつ言つ少年に、ぬこは分かつたと返事をします。

「それでも、もしも許可がでたら、その時は妹のなのはと仲良くなってくれ。俺たちは、あの子に向もしてやれなかつたから……」

「いやー、やべー！」

「俺は高町恭也、お前に名前あるのか？」

「いやー、やべー。」

「 むいか、 むいか…… 変なやだな

「 なーうつー

…… むいかは『 気づこころの』 のでしょうか？

少年と意志の疎通が出来てゐる」と。まあ、『 気づこても、気づかなくても、むいかせむ』、なにですかね。

原作どちらでも、恭也は道端で出合った猫に餌をあげるために、コンビニに行ったりしています。

ちなみにその猫、後に自分の子供を見せるヒソードがありなんかして、とってもホンワカです。

## 幕間 ひるいん？ の憂鬱

私立聖祥大学付属小学校は一年生の教室で、一人の金髪美少女が窓際の席に座っています。

「はあ……憂鬱ね……」

重い空気を肺から出し、言葉通りに憂鬱そう。頬杖をつきながら、とても小学生とは思えない哀愁漂う瞳で、窓の外を見ていました。

「どうしたの、アリサちゃん」

つい先日、その金髪美少女、アリサ・バーニングスの友達となつた月村すずかが、心配そうに声をかけます。

アリサは憂鬱そうな表情を隠すことなく、将来は大和撫子な美人になるわね、この子……と思いながら、

「ちゅうとね……」

そう言つて、手をひらひらさせました。

「話せないことなの？」

「別に……ただ、ちょっと搜してるヤツが見つからないのよ」

それだけ言つと、重い息をハア～っと吐き出し、話はこれでお終いとばかりに再び外を見ます。

アリサには、前世の記憶がありました。  
ちなみにアリサ・ローウェルな前世ではありません！  
あんなトンデモ悲しい平行世界な前世ではないのです。

かなり、近いけど……

それはともかく、アリサは前世で一人の青年とお付き合いをしていました。

特に際立つた才能がある男ではありません。  
イケメンだった訳でもありません。

それでも、前世の彼女は彼のことがとても大好きでした。

IQ180オーバーの超絶美人にして、絶対無敵のお嬢様！

群がる男は彼女の背後関係と容姿にメロメロです。

でも、彼は違った。違ったのです！

どう違うかと聞かれれば困りますが、とにかく違いました。

そんな彼のことが、アリサは好きで好きでどうしようもありません。

だからアリサは、奥手でオタクな彼を押せ押せで口説き落とします。彼女はツンデlena強気つ子でしたが、流石に年齢が20オーバーなだけあって、こういう時は積極的でした。

押せ押せアリサに彼は目を白黒させてしばし呆然としたあと、ひやつほー、これで年齢＝恋人イナイ歴から卒業だぜ！ なんて言いました。

アリサは頬を引き攣らせましたが、まあ、これからは教育しだいよね？ なんて思いながら、につこり笑います。

彼は何かと言うと、脱 童貞なんて叫ぶおバカさんではあつたけど、言つてることと裏腹に、ガツガツ身体を求めようとはしません。

今迄彼女の周りに居た男たちとは矢張り違います。

ああ、やつぱりコイツにしてよかつた。

アリサは幸せでした。あの日までは……

ある日、彼は子供を庇つてトラックに跳ねられ死んでしまうのです。

……アリサは泣きました。

いつぱいいつぱい泣きました。

泣いて、泣いて、泣いて……そうして彼の最期の言葉を思い出します。

お前の、そういうアトコが大嫌いなんだ。だから、もう別れようぜ。  
そして、さつさと俺のことなんか忘れちまえ。

カツコつけ過ぎなのよ、バカっ！

私は絶対にアンタのことを忘れたりなんかしないからっ！  
……でも、そうね。キチンと、アンタ以外の誰かと、幸せになつて  
みせるわ。

だから、だから今だけ……は、泣い、ても……いいよ、ね……

最後にもう一度だけワンワン大泣きしたあと、彼女は立ち直ります。  
だけど、世界は彼女にとって、とても厳しかったのです……  
資産家の親を持つ彼女は、ある日、親の商売関係のトラブルに巻き  
込まれ、誘拐されて、そのまま……

アリサは、首を絞められ意識が遠のく中、最期に思いました。

ああ、死んだ、私……

こんなんだつたら、アイツにさつさと初めてをあげればよかつたな。

なのに、私ったら……

……会いたい。

アイツに、会い、たい……

会つて、今度こそアンタと……

しあわせになるんだ

次に気がついたとき、彼女は赤ん坊になつていきました。  
アリサは長い長い赤ん坊生活のなか、思つたのです。  
これはきっと、神様がくれたチャンス。

もう一度、アイツと出会い、今度こそ幸せになるための……

それでも思わなければ、赤ちゃんなんてやってられなかつた、なん

「……」とは秘密です。

「…………サちゃん、アリサちゃん！」

「ふえつー？」

物思いにふけてたアリサは、突然に身体をがくがく揺さぶられました。

アリサを揺さぶっていたのは、すずかと同時期に友達になつた高町なのは。

ツインテールをぴょーぴょーさせる、笑顔が物凄く可愛い女の子です。

前世では友人まるで居なかつたアリサは、すずかと、なのはがとても大切です。

「ねえつー！　ちゃんと聞いてつー！」

「なによ、わづ……」

「あのねあのね、昨日「ひにこねつ、あつちやー」ねさんのがきたの

つ

なのはは手をぱたぱたさせて、その子猫がいかに可愛らしか説明します。

すずかは猫派なので、なのはが仲間になつたことが嬉しいみたい。

でも、アリサは犬派です。

猫も好きですが、どうも彼がぬこぬこ言つてたのを思い出して、ちよつとイラッとする。

なんせアノばか。可愛い恋人ほつといて、猫ばっかり可愛がるヤツでしたから。

まあ、逆恨みつてやつですね。

でも、それはなのはの家にきた子猫には関係のないこと。  
アリサは首をぶんぶん振つて気を取り直すと、

「んじゅわ、今日なのはんちであそぼつか?」

今日は一度良いことに、塾とお稽古事はありません。  
すずかはあるみたいでしたが、夜からなので嬉しそうに頷きます。

そして、なのはも……

「うんっー。」

元気の好い返事です。

そして、再びどれだけ子猫が可愛らしかを語り始めました。

楽しそうに聞くすずかと、ちょっと呆れ気味のアリサ。

そんなアリサは、なほの話を聞いてるつむぎ、ふと思いつめます。

生まれ変わるなら、ぬごがいい

あのバカの言葉です。

まさか、ね……

でも、もじそりだったり、びひつよへ。

32

アリサとおのの博会まで、あともう少しへ……

……でも、お互いに『戻づくんでしようか？

「でねでね、お名前は、ぬごやんって『のつ』。」

ぶーつー… と思い切り吹き出したアリサは、わっと笑へて『戻づくかもしれませんね。

「あ、アリサちゃん！？」

「どうしたの？ 大丈夫？」

「あ、はは、は……だ、大丈夫よ、大丈夫。そんな訳ないんだから  
つ」

「なにがなの？」

「なんでもないわよ！なんでもつ！」

主人公がただのぬこだつて、みんなキッチンと理解してるよな？

人間にメタモルフォーゼで、アリサとちゅつちゅつなんてないんだ  
からなつ！

大体、ヒロ……って誰だよおまヒイきんぱつのあくあ wセダルフ t  
gふじこ

この作品自体の年齢的な設定。（原作とは関係なしにて、この設定）

ぬ」 1セコ

「じゅじん 高校2年生（とらば的な意味で一年留年）

月村 忍 高校2年生

高町美由希 中学3年生

高町なのは 小学1年生

その他は、なのはの年齢に合わせて考えつつー

## 高町ぬいせじめつます

しろーが家業の喫茶店に、みゅーが学校に、『じゅじんがなのはをバス停まで送り、そのまま学校へ、最後に桃子さんが家の『継り。

人の気配が無くなつた高町家で、ぬこの時間がのんびりとすぎています。

柔らかいふかふかの座布団の上にひょこと座り、視線の先はテレビ。

ぴつぴつぴつぴーんつ！

お皿の時報が鳴りました。

テレビからタモさんが現れ、ぬこは懐かしそうに目を細めます。でも、ぬこはぷにぷにの肉球で器用にリモコンのスイッチを押してテレビを消しました。

わくわくお皿いさんの時間だからです！

「なーうー なーううー！」

桃子さんがお出かけ前に用意しておいてくれた、お匂いはんの有る  
場所へと駆け出すぬこーー！

焼いた鮭の切り身にちくわとお米のうどん飯。

夢にまでみた人間じはん！

ぬこは「みやーおー！」と満足をつけ。

正直、ぬこはあまり期待していませんでした。

本来、塩分は猫によくないからです。

ですから鮭の切り身なんて出てくるワケがありません。  
だけども、ぬこのじゅしゅじんである恭也は言いました。

「塩分は控えめで、出来るだけ俺たちと同じ物を食べさせいやつて  
欲しい」

恭也の言葉に、桃子さんは嬉しく思いました。

だって、今までお願いなんてされたことなかつたんだもの。

だから桃子さんはほりきるのです！

猫に塩分は必要ありません。

内臓に負担をかけるので、与えない方がいいのです。  
ですが人間のうちは塩分が大量に含まれています。

でも、桃子さんはやりました！

見かけぬこが喜び踊る人間こはんですが、中身はまるで違つのです  
！！

ぬこはそんな桃子さんの工夫と苦労も知らず、久々に食べるちくわ  
とお米にこ満悦。

焼いた鮭の切り身も、骨と皮も残せず、

はぐはぐ、はぐはぐ……

あむあむ、あむあむ……

ペロリとゼーんぶ食べました。

最後に猫ミルクをいつき飲みして、けふうとげつぱ。

そうして、ことごとく歩き出す。

まんまるまつくりなここまでーこ、かつちやこほんほんみたいなしつぽと、短くぶつとこ4本の足。

そしてなんとかお腹の一部分だけが真っ白なぬこは、高町家で最も日当たりのいい場所、お庭へと続くベランダの板張りで、この家のぼすである桃子さんが敷いておいてくれたタオルの上に寝そべった。そよそよと吹く風が、ぬこの柔らかい体毛をふわり撫でた。ぽかぽか陽気にその春の風はとても気持ちよく、うつり、うつり

夢心地。とても、しあわせな気持ち。

昨夜ぬこは、ぬこになつて以来、初めてと言つてもいいくらいにゆっくり眠れました。

まだ目もあまり見えず、耳も全然聞こえない頃ならともかく、それなりに世界が解り、はつきりとぬこだと自覚して以来、初めて……

昼、獣の鳴き声に恐怖し、夜、風に擦れる草の音でピクンと目を覚ます。

だつて、ぬこは犬が怖かった。

だつて、ぬこは狐が怖かった。

だつて、ぬこはトンビが怖かった。

だつて、ぬこはフクロウが怖かった。

だつて、ぬこはカラスが怖かった。

だつて、アライグマに襲われたときなんて、ぬこは死を覚悟したぐらいた怖かった。

だつて、だつて、だつてだつてだつてだつて……

でも、もう怖がる必要はなくなつたのです。  
安息の地を、手にする事が出来たから。

ママネコとあやうだいが望んだ、ぬこことつての安全な場所。ぬこは確かにそこへ辿り着いたのです。

「あ、ぬい。アナタはこれかひどいの？」

「みやう~」

「そうだね、ぬい。」

「ぬこは、そんなのなーんも考えてないものね。」

「だって、ぬこはぬいだもん。」

今も学校から駆け足で帰つてくる、ちびっこモンスターの脅威も知らず、ぬこはママネコと、きょうだいの夢を見る……

「ぬこは、もう大丈夫だから安心して。」

「これから、じゅじゅ元気衛生して生きる、立派な飼いぬこになるからさ……」



高町家のお庭に面する板張りで、ふわふわのタオルに包まつて置けてる

ねー」

ぐでーっとお腹を見せて眠るやの姿は、とつとも愛らしく。  
なのはせ手をたたいてあしながら囁えます。

「まーちゃんかわいい~

いーえ、なのはだけじゃありません!

なのはの友達のアリサとすずかもメロメロです。

時折、ぴすぴす鼻を鳴らし、「みう……」なんて幸せそうなぬいき  
見てるし、いつも胸が熱くなってしまつのですー！

これが、萌え……

アリサとすずかはいつまでもました。

「どうな夢見てるのかなあ

「わあね。でもまあ、ここ夢見てるんじゃない?」

ふわふわタオルに顔をこすり付けて寝言なの？ ああああああ小さく鳴いてるのを見たら、誰でもそう思ひやう。

ねえ、ぬー。

あなたはどうんな夢を見ているの……？

それは白い死神の季節。

ぬここの全身が全部埋まつてもまだ足りない程の雪。  
その上をてとてと走りながら、ぬここは冬の恐ろしさを心底味わつて  
いた。

人として生きてた頃には、こんなに恐ろしきモノだとは思わなかつ  
た。

せいぜいが電車のダイヤが乱れたり、滑つて転ばないよつに氣をつ  
けなきやと思う程度で。

まず、餌がない。  
むしろぬこが餌。

それはどんな季節でもそつだけど、特に冬は餌が少ないから、必要  
以上にぬここは狙われるのだ。

ほんとう、どれだけ狙われたことか。  
ほんとう、どれだけ怖かったことか。

なんせぬここはちっちゃい。しかも真っ黒なぬここは、白い雪の上でよ  
く目立つ。

だからぬここは、こつもととてと真白の雪に、ちひちひ足跡をつけ  
て走つてた。

食べられてたまるか！ 死んでたまるか！ と、必死になつて走つ  
てた。

それでも…

フクロウに狙われ、そのフクロウをママネコが逆に狩つて。キツネに狙われ、ママネコが戦つて追い返して。

アライグマに食べられかけで、気づいたらママネコに傷口ペロペロペロペロペロ。ママネコはお腹のした。

そうして寒い寒い一面の雪景色の中、死に掛けたぬこは、ママネコの暖かいふわふわもこのお腹のした。

「一 も」

大丈夫?

「み ゃん、み ゃうつ」

だいじょぶじゃない……

前世が人だったせいか、ぬこはママネコの言葉が分からない。でも、何となくは分かっていた。  
きっと、ぬこを心配しているのだと、分かつてた。

「み ゃ、み ゃ……ん

『めぐなき』。ぬこ、あつあつへじ『めぐなき』。

ぬこがいなかつたら、ママネコはまつと樂にてを越せたはず。  
だつて、フクロウを狩れるへりこ強い猫なのだから。

「みやづ、みやーお」

いいからお眠りなさい、私の可愛こぬこ。  
いつかきっと、アナタは誰よりも強い猫になれ。  
その日を夢見て、お眠りなさい……

「ひーち、ひーさん」

暖かい……ふわふわもこもこ、あつた、かい……

ぬこママネコはひさひさひしながら、彼女の暖かい毛皮の下  
でぬくぬく、ぬくぬく。  
冬の凍つつくような風も、冷たすぎてむしろ痛い領域の雪も、ぜん  
ぜん気にならない。

ああ、ずっとといつしていたかった……  
ずっと、ずっと、ずっと……

だつて、ぬこママネコが大好きだから。

でも、ぬこは決めていたのだ。

春になつたら、遅い親離れをするのだと。  
いつまでもママネコの傍に居る訳にはいかないのだ。

だって、ここは野生の世界。

ぬこと一緒にれば、ママネコまで、

死んでしまうのだ……

でも、今だけは、ママネコの傍で甘えよつとぬこは思つ。

あつたか ほわほわ だいすき おかあ…… セン

ママネコは、ぬこが何を考えているのか分かつっていました。  
だから自分の下から巣立つていった子供達に、ぬこことって安全な  
場所を探すように感じたのです。

なんでそんなコトが出来たんだって？

あのね、ママネコは、この一帯を治めるスシなんですよ？

だれよりも、だれよりも強い、灰色猫。それが彼女。

そんな私の子なのだから、アナタはきっと強くなる。  
きっと、きっと、強くなる……

でもねこは、そんなママネコの期待もなんのそのー。  
あつたか ぬくぬく ぽややん って、ママネコの体温に幸せを感じ  
ん。

だって、ぬこはずっとただのぬこのまんまだもん。

なのは何かに気づいたよびます。

「やうだつ！

と、その時でした。

なのはも、すずかも、もちろんアリサも、ぬこのあんまりにも幸せ  
そうな寝顔に、うつとつめいやー。  
時間を忘れてただぬこの寝姿を見続けます。

なのははぬこが大好きです！

だからなのはは、ぬこに自分の物をプレゼントすることしたのです！

シインシインな髪が歪なサイドテールになるのも嬉しいに、なのはは自分の髪をじげるコボンを送りました。

「あっ、ダメ！ なのはちやん……」

「待ちなさい！ なのは……」

アリサとすかは、なのはが何をしようとしているのか分からました。

だから声を荒げて止めようとした。

でも時既に遅し。

なのははつボンをぬこの首に巻いて、やゆり「いや、つ」ぬこの瞬  
末魔です……

子供の力。

でもぬこにとってはもの凄い力。

そんな力で絞められちゃつたら、ぬこは夢から覚めず、そのまま新  
たな場所へと旅立っちゃいます。

ぴくぴく、ぴくぴく……止まらない痙攣。そして、パタッと動きが  
止まりました。

また、余ておもしょい。  
……れよひながり、ぬる。

なー

ぬこがお風呂から田を覚ますと、そこは喧騒の真っ只中。何だか首が痛いのと、少し苦しい気がするけど、正直それどこのじやない。

叩かれたのか、頭を痛そうにおさえてわんわん泣くのはと、眉を顰めて怒り顔の「じゅじん」。

そんな「じゅじん」に、見知らぬ少女が二人、平身低頭にぺこぺこ頭を下げていた。

「なーう」

ぬこが声をかけると、「じゅじんはホッとした顔でぬこを両手で包み持ち上げた。

「じゅじんは堅い手の平だけど、ぬこは『じゅじんの手が大好き

ママネ』には適わないけどなー！」

「大丈夫か？」

「みや？」

「なんでもなこなりここんだ。……なのむー。」

「あ、こ、ひ、」

泣きながら、それでもなまけつ返事を返すのは。

……いつたに何があった、「じょじょじょ？」

「悪こじとつたら、どうあるんだつた?」

「「るあんなやこかぬの……」」ぬこね、ぬじりやん……

……何を謝つてゐのかわつぱつです。

でも、ぬこは空氣をキチンと読む好こぬいです。

「」

と一概優しくかけてあげるのだ。

「の口、なのはは初めて怒られた。

もうひん、今まで小さい事で怒られた」とせ沢山ある。

それでも、こんな風に怒られたのは、本当に初めてで。

いつもいっ子でいようとしていたなのはは、こりせりて怒られた」とで、肩から余計な力が抜けた。

なのはは好い事したつもりなのに、結果的にぬいを殺しかけてしまつたのがショックだつたけど、それ以上に兄に怒られたコトの方がショックだつた。

でも、すぐに頭を撫でられて、優しく諭してくれる兄にとっても嬉しく思うのだ。

だって、好い子でも悪い子でも、なのははなのはとして、きちんと見ていてくれる証拠だつたから。

そんな当たり前のコトで、なのはは今まで気づけなかつた。でも、もづづいた。

私は、このままでいいんだ、って。

なのははこの口から、べたべたに兄に甘えるようになる。  
ぶらりんなのかやさんの誕生である。

それは、なのはと仲良くしてっこひ、とても他愛のなこと。  
当然、ぬこは覚えています。

「いやー

「なあ、ぬ」

「みやづらへ。」

「お前に頼んだ」と、覚えてるか?」

「俺は、あの子に向もしてやつてなかつた。だからお前に頬もつと  
したんだ。でも、それは逃げだ」

「みやづ..」

「俺が、俺たちが自分から動かないとダメだったんだな……」

「じゅうじんの膝の上には、安らかに眠るのねがいる。  
こんなのが今までなかつたことだ。  
のはは、誰にも甘えない子だったから。

でも、それは終わりを告げた。

「お前のおかげだな。あつがとく、ぬ」

「ひー？」

ぬじは、じゅうじんが何を言つてゐるのか、わつぱりわからん。

でもま、いつか。

だつて、じゅうじんも、桃子さんも、みやーも、つこでひんすいも、  
みんな笑顔だし。

そして、のはも……

「おひこちゃん……ぬいちゃん、ん……だい、す、も……」

といつも幸せそつな寝顔だからなー。

この世界を流れる大きな川。  
その流れが、この日変わった。  
変えた切欠となつたのはぬいだつたけど、それは本当にひつちやな  
モノ。

本当に本当に、ひつちやな、きつかけ。

「おやすみ、ぬい」

「いーちゃん、いーちゃん」おやすみ「いーちゃん

優しい月の光が、ぬいじるしゅじんを照らしていた。

……つて、今気づきましたけど、ぬこ？　あなた、死んでなかつた  
んですね？

## オリキャラ設定

ママね口

海鳴や国守台からちょっと離れた場所にある山の奥深く。  
そんな山深い森のヌシである、通常の猫よりもふたまわりほど大きい  
い灰色の猫。

ぬこを産む前は、天猫拔爪牙（笑）でツキノワグマと戦い勝利した。  
後10年ほど生き延びることができたら、猫又ビックリかもの姫  
的なヌシになるかもしない。  
深く考えてはいけません！

きょうづだい

ママネ口の下から巣立つたのち、各自住む森や山でボス猫となる。色は白だったり虎縞だったり。

現在嫁さん候補がいたり、旦那さん候補がいたり。

基本、普通のボス猫。猫を逸脱した存在ではない。

海鳴や国守台付近に生息はしていないが、その地の猫に相談し、この地の【猫】のヌシである陣内美緒を紹介してもらつて、ぬこの今後をお願いした。

高町ぬこ

前世が人間だったため猫の言葉がわからず、人間の言葉しか理解できない。

ぬこの言葉 자체は猫語wなんで、ぬこの言葉は猫たちに通じてます。ちなみにぬこの意思を感じ取れるのが恭也。

KYOUYAではないはずだけど、ぬこの意志を感じ取れる時点でも KYOUYAかもしない。

ちなみに小太刀でバリアジャケットを斬り裂いたりとかはない。もちろん、恭也がリンクカーボアを持ってたりともない。あれ？ いつの間にやら恭也設定に……

ところで、こいつら本当に猫か？ と思つかもしうんが、ところの猫はこんなもんだw



「ひめこー！」

ぬこが高町家に嫁（？）に来てから、もう随分の時が流れました。

具体的に言えば、一ヶ月ぐらい？

ひとりで随分？とかぐだらないシッ 「ハササギは受け付けません！

それは横に置いといて、相変わらず成長しない子猫のままのぬこを、  
ゼロが訝しげに睨つ高町家……かと思いまや、そんなの全然関係ね  
ー。

むじる、

「可愛いからいいんじゃない？」

とはこの家のボス、桃子さんの言である。

「かーさんー？ もしかしたら病氣かもしないんだよー。」

みゅーが少し困った口調でそう叫ぶけれど、

「大丈夫だと思つわよへ。だつて、ぬいがりやんだし」

なんの説得力もない言葉。

でも、一番ぬこと仲良しななじゅじんが、「クンと頷いたりしたもんだから、結局はそのまんまになりそな空氣。

だけど、ぬことは思つのです。

「みやあみやあ、みやー」

ぬこがちつちゅーのは病氣じやなことは思つ。  
それでも病院行つて検査するのはいいと思ひやつ。

「だ、そつだ。高町ゆよ」

「あのね、恭也。ぬいちゃんが何思つてゐるのか分かるの、アンタだけなのよ?..」

「わつだよ恭ちゅんー。はたから見たら変な人なんだよー。」

「わ……ゆさんせともかく美由希。今日の鍛錬、覚悟しておぐがい  
い」

「横暴だよ恭ちゅんー。」

「なーー。」

「じゅうじん、みゅーはぬいじゅうじんを心配してくれてるんだぞ！」

ぬこはわたわた抗議の声をあげるみゅーの身体をよじ盛り、柔らかおっぱおにしがみつきながら、優しく肉球ふにふこの手でアゴにぱんち。

田下の者に優しくするのは、田上の者とひと別然なのです。

「……仕方ない。美由希、ぬこに感謝ひとつ」

「だからぬいちゃんが何言つてるのかなんて分かんな」とばーー。

ぬいのぬいぱんちを顔に受けて恍惚としながらの抗議は、誰の心に響くことなく、むなしく高町家の朝の空氣の中に消えていきました。ついでに元が人間だから何でしょうな？　ぬいもおつぱねおふぱふ気持ち一です。

……あんま調子にのつてると、刺しますよ、ぬい？

まあ、こんな感じで一ヶ月。

ぬこもすっかり高町家の一員です。

そんなぬこが、いの一ヶ月で変わったことと並べば……

黒こまんまるぼでーに映える、まつかなリボンがついた首輪でおしゃれさんになつたことと、大切なお友達が沢山できたこと。

ちゅうと懐かしい匂このするシンテレ美少女アリサちゃん。  
紫色の髪つてなんだよー? な、すずかりちゃん。

そして一番たいせつなお友達は……

「ねえおにーちゃん。ねーちゃん、今日も神社に行くんでしようか?  
?」

なのはが田をキラキラさせてます。

ぬこと一緒にけば、つぶらな瞳のあの子と仲良くなれるかもしだせん。

なんせ、ぬにナシで行つても逃げられてしまつ。

なのはだけじゃなく、アリサも、すずかも、みゅーも、じゅじんまでも!

「みやん」

「行かないそだ。今日は病院に行つて検査してもひつと並つてる」

「せつかー、ざんねん」

「また今度一緒に行けばいいだろ。ただ、その時はキチンと誰か

……やうだな、俺が美由希が、アリカちやんのトロの轟かで。」「内の誰かと一緒になきやダメだ」

「はーー」

手を上げて元氣よく返事をするなはが、こゝしょり行くのなら、おにーちゃん さがいにですーとぽかつに、ポフッと彼の胸に飛び込みました。

ぬいどみゅー。『じゅじゅんとなのは。みんなひとつ仲良し。

……本埠、とても暖かな家族の風景。

桃子さんせ悪ひのどす。

これも、みんなぬいぢやんのおかげよね。

もともと仲よかつたけれど、『じゅあで仲良しせざじやなかつたもの。

「あつがとへ、ぬいぢやん」

「なう?」

ぬいこに「そんなこと言つても仕方ありませんよ?」  
だって、ぬこが特別何かをした訳ではないのです。  
だからぬこには分かりません。  
むしろ、ぬこの方が、かんしゃ、かんしゃなのですよ?」

ただ……

「愛する妻と子供たちが最近冷たい……」

はぶられたせいか、部屋のすみっこでイジイジしてゐしるーがキモイ。

「もう、士郎さんったらバカなんだから」

つついとそんなしるーに身体をよせる桃子さん。  
そしてイチャイチャ、イチャイチャ……

「愛してるよ、桃子」

「私もよ、あなた」

2人を包むラブバリア。

ごしゅじん、みゅー、なのは、そしてぬこは、とても慣れた様子で  
スルーしつつ、

「さて、そろそろ学校に行くとするか」

「そうだね

「おにーちゃん。なのははバス停まで送つて行つて欲しいですー。」

「ん。ぬこ、帰つたら病院に行くからいい子にしてるんだぞ

「なーう

ゆつたりと家を出る「しゅじん一行と、それからじばくして慌ただしく出ていく桃子さんとしろー。

そしてぬこもお散歩に出かけます。

この海鳴の町は、とても猫に住み心地のいい街。

海があり、山があり、そして野良猫を診てくれる獣医さんいて、そんな獣医さんの良人は、力ない野良猫たちに餌をくれます。

そんなこの町の猫達の王さま陣内美緒さん。

彼女に今日の病院代をまけて貰えるようにお願いしに行くかー

ぬこは足取り軽く、てとてと海鳴の街を闊歩するのでした。

フーッー！

ペシトショップの前に、スクーターに跨つてる美少女発見！  
ぬこはその美少女に向かつてダッシュです！

「なあー！」

「ねっ、高町さんとのぬこじやん。お散歩中かい？」

「こやー！」

陣内美緒さん。

ぬこは前世も含め、初めてみました。

リアル猫耳少女！

もしもぬこが人間だつたら、間違いなく口説いてます。

だつて、猫耳だよ、猫耳！

「ふつふーん。ダメだぞぬこー。わたしの好みは、こいつでつかくて、  
優しくて、料理が上手な人だかんね！」

「「いや、……」

それは残念です……

「ぬこには久遠がいるじやん」

「みやうみやーー！」

そんなんじゃないし！ 大体ぬこは猫で久遠は狐だぞ？

「あははは、わかってるわかってるって。種族を超えた愛なんて、ロマンチックだよねー。で、なにしに来たの？」

「みやつーみやみやみや、みやん！」

「ほほう、自分から病院行つて注射されるなんて、アンタ漢だね。いこよ、私から愛に言つとく。病院代まけて欲しいってさ」

元が人間ですからね。それほど注射が怖いわけじゃないんですよ、ぬこは。

それよりも、自分が変な病気を持つてないかの方が怖いのです。ごしうじんに迷惑がかかりますからね。

だから、病院代をまける交渉をしてくれる美緒にとっても感謝のぬこです。

「ハーハー..」

「いじつて。これも海鳴猫の元締めたる私の役目だかんねー。」

この町は、本当に猫に優しい町だ。  
ぬこせ、この町に連れてきてくれたママネコときよひだいへ感謝を  
捧げたい。

だからや、またいつか会えるよな、かあさん……

と、そんなアンニコイでノスタルジックに良い感じでキメタぬこだ  
ったのに……

「あー、美緒ちゃん！ その子めりーー！」

12~14才くらいにみえる薬臭い胸が平坦な美少女が、はあはあ  
息を荒げながら、手をこぎこぎしてぬこじりよつてきたせいで心細いです！

少女は腰まで届く銀色の髪がキラキラ輝いて、とても可愛い美少女  
なのですが、どこか近寄りがたい雰囲気を醸し出していました。  
普通の猫なら薬臭い時点では敬遠しますし、何よりそのオーラ。只者  
ではありません！ よつする、怖い……

でも、ぬこせ『そこは』特に気にならませんでした。

薬臭いのは病院帰りのかな?とは思つけど、前世が人間だつたら特に薬臭いのはきにならないし、ぬこには変なオーラはわかりません。

「おひ、フィリスちゃん。この子は高町さんちのぬこ。たぶんだけど、この子ならフィリスに懷いてくれるんじゃないかな?」

「ほ、ほんと?...」

美少女だけど、変に鼻息荒く興奮してるのは何だかな。  
だからちょっと煩わしいんだけど、黙つて頭なでされたりもふ  
もふされる。

美緒さんの顔を潰すわけにはいきませんもんね。  
本当は、胸が平坦なの、ぬこの好みじゃないんだけど……

「ほんとだー! 私が触つても逃げないつ!」

「……やつすぎないようにね。ほどほどにしないと、この子にも嫌  
われるよ? それにこの子さ、久遠の……」

「あー、この子がそうだったんだ。うーん、もう、かわいいつ。……  
ね、ねえ、ぬこちゃん。久遠なんかより、私と恋人になりません  
か?」

「こやん

久遠は恋人じやない。でも断る。

「みやみやみやみやん」

おひばお大きくして出直してきやがれ。

「いや、流石にそれは言こすぎだつて」

でも、ぬこの言葉が解らな」「フィリスは、嬉しそうにぬこを抱きかかえると、まずは頬ずり。

そしてお腹を自分のちゅぢやな可愛い顔に押し付けて、もふもふもふもふ。

次は肉球ふにふにふにふに。

10分がすぎ、20分がすぎ……30分になり1時間が……  
おわらない、おわらない、おわらない……

ぬこのちゅぢやな耳がピーンと立つて、むこむこ尻尾も天をつく。

「なー！ なーなーなーーー！」

いいかげんに、しるーつー

以降、フイリスちゃんはウザい子としてこの認識を抱いていました。

……ちょっとかわいいんですね？

今回名前の出たとらはキャラを知らない人のための人物紹介

陣内美緒……とらは2のヒロイン。猫耳猫尻尾付美少女。恐らくだが、夜の一族の血を引いた先祖返りだと思われ。

つてか、99.99%は人間だが、残りの0.01%が猫の遺伝子持ち。つてのが原作設定。意味がわからない。

先祖が猫と結婚して子供でも産んでたのだろうか？ それともハイブリット・ヒューマン？

前者だとしたらアリサがメインヒロインでも問題ないな。この世界では猫と子供作れるって証拠だしw

話戻して、養父である啓吾と高町父はこつそり繋がりがある設定だが、それが生かされることは多分ない。

フィリス……とらは2で敵役。とらは3でサブキャラ。そしてリリカルおもちゃ箱でヒロインに昇格した出世人。

HGS持ちの戦闘用クローン体。似たような設定のフェイトよりも数倍過酷な原作設定持ち。つてか、彼女の設定をマイルドにしたのがフェイトっぽい感じ。

小動物大好きなのに、病院臭いせいなのか盛大に嫌われる可哀そ  
うな人。

ちなみに彼女のオリジナルであるリストイは、逆に動物関係には滅茶苦茶好かれてる。つてことはHGSは動物に恐怖感を与えない？現在はお医者さん。成人ぶつてるけど実年齢は7~8才。みかけがちみい美少女である。

暗いの怖い。幽霊やだ！ あんまり怖がらるとお漏らしちゃうかも……恭也とのあのシーンではしつかりお漏らしちゃったしね

念の為に言つとくナビ、ぬこのヒロインではない。

愛……とらは2のメインヒロイン。獣医さん。野良は無料なんて恐ろしい経営をしてる人。料理はシャマル級といえば理解できるな？リリカルの第一話でユーノの治療したのはこの人らしい。つてことは、ジユエルシードの被害をとともに受けた可哀そうな人でもあるのだろう（涙）

本作ではロリジャイこととらは2の主人公耕介と結ばれた設定。ちなみにこの作品において名前だけで出番はない。

久遠……とらは3での那美ルートの鍵キャラ。リリカルおもちゃ箱でのなのちゃんの相棒。リリカルなのはそのポジションをユーノに取られた。

永遠の子狐モード搭載。巫女幼女に変化可能。大人巫女に変化すると尻尾が5本に増える。

昔彼氏を残酷にねつ殺されてぶち切れた衝撃で祟り狐に。日本3大悪妖に並び称される。でも今は猫にすらいじめられる。でもとつてもつおい……はず。雷ばりばり。く。くう～ん。

これでどんな人物なのか分かつた奴は天才だ。

この作品、主なオリキャラはネコしか出ません。ってか、ママネコ、きょううだいぐらいなもん。

## 高町なのは　ぬけのこる風景

これは夢だよね……？

なのははそう思った。  
だって、夢の中の大人になつたなのはの周りには、家族がない。  
大切な大切な家族が。  
なのはは笑っていた。  
それが当たり前なんだと。

なのはの両隣にいる友人と思しき2人。

アリサとすずか……ではない。  
見知らぬ人だ。

しかも夢の中のなのはは空を飛んだ。それも、とても気持ちよさそうに。  
少し羨ましいと思ったけれど、その後の自分の姿に、やっぱりこれは夢なんだと絶対した。  
だって指からビームを出して、「少し、頭冷やそうか……？」って怖いことを言つてるから。  
ビームを浴びせられた女の人の恐怖と絶望と虚無に苛まれた顔が、なのはの脳裏に焼きつく。

……むしろ私が頭冷やそうよ？

なんて思いながら、なのはは心の底から願うのだ。

帰りたいと。

大好きな家族と、親友と、ぬこちゃんの居る、あの場所に。

わたしは高町なのは、小学一年生。

家族は父と母と大好きな兄と姉。それにぬこちゃん。  
親友はアリサちゃんとすずかちゃん。

得意な科目は理系全般。

趣味はゲームとふにふにともふもふ。

特技はAV機器の取り扱い全般ともふもふ。

将来の夢は、おかーさんみたいな喫茶店の店長さん兼もふらー。  
それか、おにーちゃんのおよめさん兼ふにらー。

この二つの夢の素晴らしいことは共有できる所だ。

なのはは信じてる。奇跡を！

たとえば、実は自分は母の連れ子で、兄は父の連れ子とか……  
そうすればなんの問題もなく結婚できる！

せつじて、おとーさんとおかーさんのよつこ、おにーちゃんとなのははふたり仲睦まじく、平穏に、幸せに暮らしていくのだ。

そり、だからさつとこれは夢。夢なのです。

もう魔法少女になりたいとか、お空を自由に飛んでみたいとか思いません。

だから帰して。わたしを、家族のもとに、かえし、て……

なのはは、夢の中で大人になつた自分が、「ブラスター3、エクシードモード発動！」とかいつて光り輝くのを最後に、目に映る光景全てが光になつた。

光、光、光……

その光の先に……

……手を伸ばす。

光の先に僅かに見えた黒いなにかにむかつて。

それを掴んだかと思つた瞬間、目が覚めた。

なのはは息をハアハア切らしながら、のそりと身を起こした。

不安に苛まれながらキヨロキヨロ周囲を見渡せば、見覚えのある部屋。

部屋の中はまだ暗く、まだ夜明け前なんだと分かった。

「やつぱり、夢だったの……」

ホッと胸を撫で下ろし、なのはは寝汗に濡れたパジャマのまんま、もう一度お布団を頭までかぶった。

まだ私が起きていに時間じゃない。

そんな言い訳をしながら、なのはは今度こそ好い夢を見るのだと、もう一度目をつぶる。

今度の夢は、見知らぬ少女とアリサちゃんが、何でか分からぬけどいがみ合って喧嘩してる夢だった。

「ちよつと…いい加減にはなしなさこつー。」

「ダ、メ……！ くおん、といつしょだもん」

「 むー！ 私といつしょだよねー？」

「ちがい。あらじめじやない。くおんといつしょー。」

なのはとすずかは、そんな2人を見て笑うのだ。

それはとても楽しい夢だった。

とてもとも、とっても……

だから……

なのはは祈ります。

この夢が未来になれと。

さて、高町家の朝はとても早い。  
でも高町なのはの朝は遅いのだ。

兄と姉が剣術の朝稽古に出ても眠り続け……

父と母が家業の喫茶店の準備に家を出ても眠り続け……

兄と姉。父と母が朝食のために家に戻ってきても、まだ寝てる。

でも、それは仕方ないとなののはは思つのだ。  
だって遅いっていつても、それはなののは家族と比べてのことでの一般的な家庭から見たら十分及第点である。

兄と姉が朝稽古に出るのは口が昇る前。

父と母はそれよりも若干遅いが、それでも口が地平線を照らす頃。

元より低血圧気味ななのには辛すぎた。

それでも起きようとする努力はした。

大好きな兄の朝稽古を見てみたい。

もしくは疲れて帰つてくる兄を笑顔で出迎えてあげたい。

だけども、無理して起きてもフラフラで、見かねた兄と姉に自分の部屋のベッドに放り込まれたのも最近の記憶だ。

そうは言つても、以前に比べれば大分よくなつたのも事実。

前は朝食の準備が出来てから起きたものだが、今は朝食の準備が完全に終わる前に起きることが出来た。

しないけど。

なぜかつて？ それはね……

キ、キイ……

あの子のために僅かに開いたままにしてあつたドアが、軋んだ音を立てて開いた。

起きる時間なんだ……

2度目の夢は楽しかったから、もう少しうど寝てたいです。

そう思わなかつたと言つたらウソになるけど、それ以上の欲求がなのはにはあつた。

思わずまぶたを開きそぞりになる衝動をこじらえ、なるだけ自然に寝息をぐーぐー立てる。

するとなのはが眠るベッドの上に、ぴょんと何かが飛び乗る衝撃。

てとてとてと。

足元から枕元に歩み寄つてくる小さな気配。

顔がくふふ、とにかくやけやう。

話を聞いたすずかとアリサが心底羨ましがつた、なのはの毎日の朝。あれ以上の快楽はあんまりないと、なのはは思つてゐる。

だから、せやくせやくせやくつー

なのはの願いが通じたのか、それともそれがその子の役目だからなのか。

「うー

耳元で鳴ぐ子猫の鳴き声。  
早く起きると鳴いている。  
でも、なのはは起きない。

「うー

起きない。

ぜーつたにー！ 起きないー！

だから、早くしてよ、ぬいひゃん。

期待に胸が熱くなる。

それはまるで恋のよつと……

もしもおこーちゃんがいなければ、なのははぬいひゃんに恋したかもしがせん。

なんて思つてこない、なのはの頬にペシッ！と衝撃が走った。

ぬいのふに肉球で呑かれたのだ！

思わず伝説の魔法少女、カードキ プターを ひきやんみたこい、  
はにゅーんつてなつちやこれ。でも、まだダメ！ あと4回！ 4回ぬいぱんぢれぬまでも、せ  
ーつたに起きなこつ！

「な~う？」

おきないの？

やつ血われてる仮かして、なのはは罪悪感が……

でも絶対に起きなこもん！

無駄に闘志をみなせいむんなのはだつたが、そんな彼女に恋えた  
のか、ぬいのぬいぱんぢが弾び破裂した。

「いやー、いやー！」

ペシッ！ ペシッ！

右ぬいぱんぢ、左ぬいぱんぢの素晴らしこめのハンドルーチョン  
ブロー。

なのははもう昇天しから いやつです！

だけど、まだ！　まだなのっ！  
あとにかいっ、にかいなのっ！！

それまでなのはは死ねないのっ！

そんなんのはの決意に応えてか、ぬこはなのはの平坦な胸の上にの  
つかると、大きく両の前足を上げた。

やひじて……

「うわー！」

なのはの両頬を挟むようにして、ペシンーっと今必殺のだぶるぬこ  
ぱんちりー！

ぬこのふにふに肉球が、なのはの頬をふにふにする。

しあわせ……

小学一年生にして、ちょっと間違った方向に逝きかけてるなのはは  
今日も元気。

頬を挟んでついにやうやく言ひこぬこを抱きかかる様にして起き  
上がる。

「おはよーぬいひさん！」

「みこ」

至福の顔で挨拶すると、なのははそのままぬこを押し倒す。ふわふわもこもこのお腹に顔を押し付けまふまふするのだ。なのはの毎朝の習慣は、ぬいじぱんちで起じられて、わうじてぬいのお腹をモツる。

一級の【もふり】【ぶり】として自然な行為。

もふもふ、もふもふ……

まふまふ、まふまふ……

「はーしゃー……しあわせなのぉ」

「ーしゃーひー」

「あー、またやつてゐよ、なのは……」

「なのはつたら、ほんと『ぬいがらやんの』ことが好きなのね」

これが、高町なのはのぬいがらの風景である。

こんなのが、毎日、毎日……

いつか彼女が大人になるその日まで、ずっと、ずっと、続くとい  
いね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0029y/>

---

とわのこぬこ

2011年11月6日16時35分発行